

はじめに  
埴保己一から  
現代人へのメッセージ

日本の障害者がたどった歩み

埼玉県は平成十九（二〇〇七）年、障害者の社会参加推進の一環として、意欲的に活動している全国の障害者を対象に「埴保己一賞」（はなわほきいち）を制定しました。

平成二十一（二〇〇九）年四月、創立百年を迎えた埼玉県立盲学校（もろう）は、学校教育法の改正（改正）を受けて「埼玉県立特別支援学校 埴保己一学園」と改称しました。外国では郷土の偉人名を校名にしているケースをよく見かけますが、日本ではあまり例がありません。

校名になった「塙保己一」<sup>(註2)</sup>とはどんな人物なのでしょう。江戸時代後期に活躍した全盲<sup>ぜんもう</sup>の学者です。日本古来の貴重な書籍・文献を後世に確実に伝えていこうと、全国から収集し、六百七十冊にもなる『群書類従』という日本の文化史上に類を見ない大文献集<sup>おんげんしゅう</sup>を編集・発行したのです。

現代風に言えば、学者であり、編集者兼出版社社長でもあり、さらには研究・教育を担う大学の学長であるといったところでしょうか。

明治以来、塙保己一は日本を代表する偉人の一人として教科書等に登場してきました。そこでは盲目の身で立身出世した代表的な人物、努力の人・克己<sup>こつき</sup>の人として描かれています。大衆芸能の講談<sup>こうだん</sup>や説教<sup>せつきょう</sup>節<sup>ぶし</sup>でも「塙保己一と根岸肥前守―出世競べ―」<sup>(註3)</sup>としてさかんに演じられてきました。実は、この立志伝<sup>りっしでん</sup>中の人物像は、全体像のほんの一面にすぎないのです。

封建時代に重度の身体障害という運命を背負って生きた人物を、その時代の社会的背景などいろいろな角度から光を当てて見ることによって、素顔の保己一像が浮かびあがると同時に、日本の障害者がたどった歩みが見えてきます。

なにより興味深いのは、厳しい身分制度など制約の多い封建時代にあって、重度障害者が精神的自由を謳歌<sup>おおか</sup>したという事実です。それを可能にした背景には、本人の才能や努力だけではなく、直接、間接に日本の障害者の歴史や互助の精神に富んだ当時の社会、それに幕府による盲人保護の制度などの影響がありました。

日本の文化史上に「盲目の大学者・塙保己一」という大輪の花を咲かすことができたのは、決して個人の努力と才能だけによるものではありません。

### 世界の偉人が《人生の目標》とした保己一

世界各国で出版されている偉人の伝記シリーズには必ず登場するヘレン・ケラーという三重苦のアメリカの女性がいます。目が見えず、耳が聞こえず、話をすることもむずかしい重度の身体障害者です。一歳七ヶ月のときに重い病にかかり、生死の境をさまよったあげく、どうにか命は助かりました。しかし、その時を境にコミュニケーションの手段をまったく奪われてしまったのです。

彼女の言葉を借りれば、それからというものの、本能のままに行動する《動物のような子》でした。しかし、両親の愛と家庭教師のアン・サリバン先生による献身的な指導によって豊かな心をもった《人間》へと復活したのです。

涙ぐましい努力に加え、多くの人たちの支援を受け、ハーバード大学に学びました。在学中から多くの人たちの関心を集め、学業面でも優秀な成績をおさめることができました。

卒業後は多くの学校から教師としての誘いがありましたが、それを断りました。個人的な幸せよりも、むしろ自分と同じ障害者の社会的地位向上のためにその後の人生をささげたのです。

そして、一生の間、全世界に向かってこう訴え続けました。

一 障害者に向かって——たとえ心身に障害があっても勇気と希望をもち、胸を張って生きていってください。「障害は不自由であっても、けっして不幸ではありません」と。

二 一般市民に向かって——障害のない人たちは障害者を理解し、すべての人が協力し合い、だれもが人間らしく尊厳をもって生きていける社会を築こうではありませんか。

三 全世界に向かって——どんな戦争も止めさせなければなりません。戦争は障害者を生みます。平和な社会だけがすべての人たちの命の尊厳を守ることができるのです。

ヘレン・ケラーは日本を三回訪問しています。日本と中国との関係が悪化し、暗雲立ちこめる昭和十二（一九三七）年、二度目は日本が戦争に負け、何を信じて生きてゆけばよいのか国民全体が自信を失い、国中が混乱していた昭和二十三（一九四八）年、そして、晩年の昭和三十（一九五五）年です。

日本各地で講演会が開かれたのですが、昭和十二年に埼玉県を訪問したヘレン・ケラーは、埼玉会館で開催された講演会でこう話しています。

「わたしは特別な思いを抱いて、この会場にまいりました。いつか日本に行ってみたい、日本に行ったら必ず埼玉を訪問したいと長い間思っていました。その夢が、今日かないました。それは、わたしが人生の目標とし、苦しく、辛く、くじけそうになったときに心の支えとした

人が、この埼玉ゆかりの人物であったからです。その人の名は《塙保己一》といます」

満員の聴衆の間に、どよめきの声があがりました。参加者は塙保己一という名前は学校で習って聞いてはいたのですが、こともあろうに世界的偉人として名高いヘレン・ケラーが郷土ゆかりの人物を《人生の目標》としていたというのですから。

### その喜びと感謝の人生

明治四十年代になると、ヘレン・ケラーのことが特に教育関係者の間で話題になっていました。彼女がまだ二十代のときのことです。本能だけで生きているような子でも、教育によって《世界の偉人》といわれるほどの人物に成長することが証明され、いかに教育が人間の成長に大切であるかが強調されたのです。

ヘレン・ケラーが人生の目標としたという塙保己一の生涯に目を向けてみましょう。厳しい運命を背負って人生を歩んでいた青年が、ある時期を境に、どんなに困難な状況にあっても、不平不満とは無縁の《喜びと感謝の人生》を送りました。実は、この保己一も十六歳(註3)のときに自殺未遂事件を起こすほど悩み苦しんでいたのです。

現代ほど価値観が混乱している時代はないといわれています。「生きがいとは?」「幸福とは?」等の問いに自信をもって答えられる人がどれだけいるでしょうか。わが国では、ここ十

年以上にわたって、毎年三万数千人もの自殺者が出ており、減る兆しはありません。

重い身体障害という運命を背負わされながらも、あたかも人生を謳歌するかのようになきた埴保己一の生涯とその社会に目を向けることは、今日的な意義が大きいと思うのです。

註1 学校教育法の改正について

平成十九年四月より施行された改正学校教育法によって、これまでの「盲学校」「聾学校」「養護学校」の名称は法律上、制度上すべて廃止され、「特別支援学校」に統一されました。しかし、校名として従来の「盲学校」「聾学校」「養護学校」の名称を現在そのまま用いている学校もあります。

註2 保己一の名前について

埴保己一は一生の間に何度も名前が変わっています。本書では、混乱を避けるため、すべて《埴保己一》としました。

生家の苗字は《荻野》でした。生まれて最初につけられたのが《寅之助》、間もなく目に障害があらわれた息子を心配した両親が縁起を担いで改名したのが《辰之助》、別に《多聞坊》とも称しました。

江戸に出て最初の盲人一座での名が《千弥》。さらに「衆分」という盲人一座の最初の身分に昇進したとき出身地が保木野村であることから《保木野一》と名乗りました。

一座の最高位の「けんぎょう検校」に次ぐ「こうたう勾当」に昇進したとき、一座の師匠あふどま雨富あふどま検校の本姓である《かき塙

《かき塙》をいただき、名前も中国古典『もんぜん文選』の「己を保ちて百年を安んず」から《保己一》としました。三十歳のときのことでした。

以後亡くなるまで《かき塙保己一》で通しましたが、老中らうしゅう松平まつだいら定信さだのぶにつけてもらった保己一の文庫名である《ぬるかど温故堂》を名乗ることもありません。

### 註3 年齢について

年齢の数え方は従来の塙保己一関連の書物で用いられている〈かずえねん数え年まんねん満年齢

最近の新聞で次のようなコラム記事に目がとまりました。私には不合理と思われる〈かずえねん数え年

うま生れきて息してゐるをゼロ0歳と言ふは失礼 教へなら一歳 ひとつ伊藤一彦

数え年は生まれた年が一歳。それから正月ごとに一歳ずつ年をとる。これに対して、満年齢では生まれてから一年間は零歳のまま。一はものごとのはじまりの数だが、ゼロは無。手もとの辞書には「なにもないこと」「無価値のこと」とある。





はじめに——塙保己一から現代人へのメッセージ 003

## 第1部 保己一を支えたもの

### 第一章 学問を志す者として

日本の文化を後世に伝える 音曲、医術、金貸しといった職業

夢のまた夢…… 前例にない、盲人に学問！

歴史資料の分類・整理の功績

018

### 第二章 検校の地位を利用した大事業

出世競争とお金 盲人一座の階級制度 狂歌に詠まれたその活躍、ふり

無私ので

030

### 第三章 「芸は身を助ける」とは

先人観・誤解・差別 大恩人だった「犬公方」

048

先人が残してくれた宝物

#### 第四章 般若心経に求めた救い

歴代将軍が保護した平家琵琶 「耳なし芳一」と般若心経

心の安らぎを見いだす

055

#### 第五章 朗読ボランティアを師匠に

文字文化共有の歩み 障害のある子どもも学んだ寺子屋

献身的な朗読ボランティア

063

## 第II部 世のため、後のために

#### 第六章 ときを同じく出版された『令義解』

後世への意外な貢献 困難な事業の末に 「共生社会」の精神

072

#### 第七章 聖徳太子十七箇条憲法にいだいた疑問

学問を尊んだ太子と学問に人生をかけた保己 三宝あるいは三法か

079

真実を見抜く「心眼」

## 第八章 社会問題化した座頭金

天才・平賀源内の最期 夜逃げをした旗本一家

当道座改革で発揮された手腕

090

## 第九章 列強との争いを解決した古文書

小笠原諸島の由来 列強を巻き込んだ紛争

日本領土であることの証明

097

## 第十章 明治の工業立国の父と盲学校の設立

和学講談所衰退の一因とは 明治維新の混乱のなかで

事件の真相は

104

## 第Ⅲ部 保己一に続く人びと

### 第十一章 受け継がれる盲人史の伝統

進取の精神に満ちた道

長い歴史をもつ盲人と晴眼者の攻防

114

「共生」の世紀を生きる

第十二章 盲人発明のタイプライター

伝えるものの少ない保己一の私生活 書くことへのこだわり

121

現代に通じる問題

第十三 心の目で見たヘレン・ケラー

高橋竹山のことばかり 卑下せず、驕らず、ありのままに生きた保己一

132

視力を超えた「視力」

第十四章 現代に伝わる盲僧座

もうひとつの盲人一座 檀家一軒一軒を訪ねる姿

145

人々の心と体を癒した盲人たち

第十五章 旅と芸に生きたおんな盲人一座・瞽女

生きる力を身につける場 厳しい掟、修業の毎日

152

伝統文化を残した瞽女

第IV部 生きる力を身につけさせた教育

## 第十六章 落ちこぼれを出さない教育

盲人一座の師匠のつとめとは はりの神様を破門した山瀬琢一

「与えられる福祉」と「自立のための福祉」

162

## 第十七章 伝統的な教育から就学の義務化へ

盲目の大学者を生んだ社会 あんま師弟像に見る伝統的な教育

「自ら生き、自ら営むの楽しき生涯」を目標に

170

## 第十八章 聖書をもとにつくった教科書

盲目は《天罰》ではない すべてが神の恵み

保口一、ヘレン・ケラーから広がる希望の輪

178

## 第十九章 世界に誇る日本の盲人教育の歴史

障害者の自立を助けた互助組織 維新後、教育の機会を失った障害者たち

他国にない我が国の視覚障害教育の現場

191

## 第二十章 目指すは共に学び、共に育つ教育

「田あき」と「めぐり」 不快語の言い換え 差別意識解消の近道

198

第二十一章 生きる希望と勇気を与えた先人の歩み

教科書の中の偉人伝 盲学校独自の教科書を

波瀾万丈の生涯さえ……

212

むすびにかえて——保己一理解の鍵 221

付録 盲目の先人たちの横顔 231

参考図書 243

コラム

よりみち (一) 講釈師になりそこなった埴保己一ほか 043

よりみち (二) 辞書から消えたことわざ「群盲、象をなでる」 087

よりみち (三) 異説が多い盲偉人の伝記 129

よりみち (四) ベル博士を驚かせた東洋の大学者の逸話 142

よりみち (五) 日本最古の仏教説話集『日本霊異記』から 187

よりみち (六) 聖書に見られる不快語について 209

第I部……保己一を支えたもの

## 第二章 検校の地位を 利用した大事業



埼玉県本庄市の保己一一家

### 出世競争とお金

これまで塙保己一が、『偉人』であると評価される理由として、『群書類従』の編集・出版と並んで、当時の盲人社会の最も高い地位である『総検校』にまで昇りつめたことがあげられてきました。

平の検校であっても、幕府の盲人保護政策もあって、社会的には直参の旗本と同等の処遇を受けたといわれています。実際はどうだったのでしょうか。



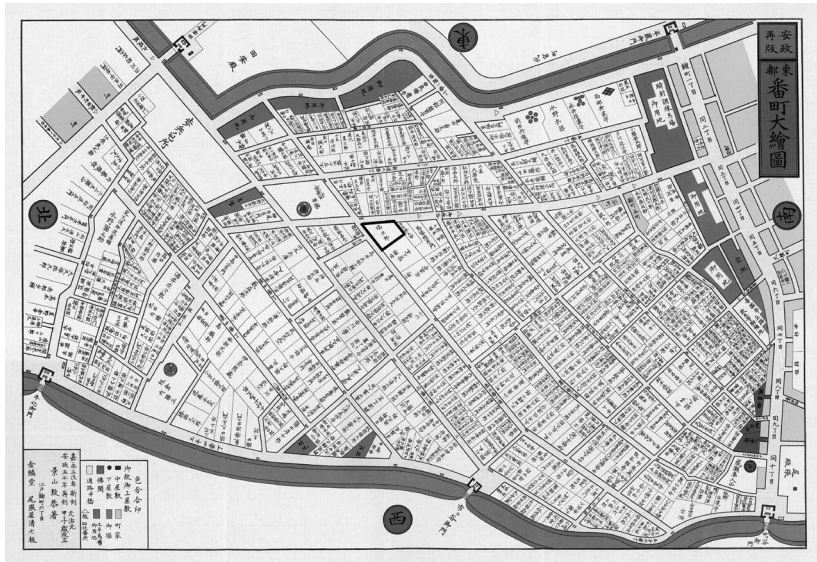
当時の江戸の切り絵図（今日の住宅地図のような図面）で、旗本屋敷が軒を連ねていた番町（ばんちやう）界隈（かいがい）を見ると、その中に盲人一座最高位の検校やそれに次ぐ地位の《勾当》の屋敷が散見（さんけん）されます。このことから実質的にもその地位が旗本同様に扱われていたことがわかります。

保己一の時代、経済的に困窮していた多くの武士とくらべると、検校たちは多額の収入が約束されており、経済的には、むしろ一般の旗本武士より恵まれた生活をしていたといってもよいでしょう。さらに、検校たちのなかの最高位である総検校ともなると、一般の武士にとって雲のうえの存在である將軍にもお目見えできたのです。保己一が亡くなった時は、大名の格式で葬儀が盛大にとり行われました。

それでは、なぜ保己一はこれほど出世することができたのでしょうか。人物的に高い評価を受けたたり、学者としての功績が認められたりしたことを理由に、この検校という地位が与えられたのでしょうか。

実は、この時代はそうではありませんでした。琵琶法師が《当道座》（ちやうどうざ）という盲人一座を組織し、盛んに『平家物語』を語り出したのは今から七百年も前の鎌倉時代のことです。その頃は、平家琵琶の名手ということで、名誉ある「検校」という地位が与えられていたのです。しかし、江戸時代になると、この地位はすべて「お金」で手に入れる「買官制度」（ばい官制度）ともいうべき仕組みができあがっていました。

「検校の地位はお金で買われるもの」という話を聞いて、「総検校・塙保己一」のイメージダ



和学講談所があった番町界隈の絵図——絵図の中の囲ったところが和学講談所のあった塙宅

(復刻古地図『元治元年(一八六四年) 御江戸番町繪圖』人文社刊より)

ウンだと心配する人がいるかもしれませんが。しかし、このことで保己一の評価は下がるところか、逆に人物的にもいかに人々から愛され、尊敬されていたかがわかるのです。その理由を考えてみましょう。

### 盲人一座の階級制度

保己一は第一級の学者として名声を博してからも、盲人一座に身を置き、『群書類従』の編集作業のさなかで多忙を極めていたときでも、盲人たちの社会的地位の向上のために汗を流しました。それは、「この盲人一座のおかげで、今の自分がある」ということを、ひとときも忘れることがなかったからです。

盲人社会での地位は七十三もの細かい階級に分かれていて、その最高位が検校です。ほとんどの盲人たちは、一生かかっても下から二十番目にもならない『四度の座頭』という位まで昇るのがやっとでした。

それでも、ひとたびこの地位につくと、『在名』<sup>ざいみょう</sup>といって、はじめて苗字<sup>みょうじ</sup>を名乗り、毎年わずかながら分配金を手にすることができたのです。「お金をためさえすれば、出世できる」、そんな思いが盲人たちの間に広がっていったとしても、なんの不思議もありません。

金銭に潔<sup>いさぎよ</sup>かった保己一とは対照的に、芝居や読み物のなかでは、盲人がまるで『守銭奴』<sup>しゅせんぬ</sup>で

でもあるかのようにお金に執着する醜い人物として描かれ、芝居や映画で演じられてきました。お金のためなら何でもするといった極悪非道な盲人の姿が描かれた勝新太郎主演の映画『不知火検校』や井上ひさしの戯曲『敷原検校』などは、その一例ですが、まったくのフィクションとはいえない実態があったようです。

一座に入門した盲人は、とにかくお金をこつこつ貯め、検校になることを目標にして、一生の間、出世への階段を一段一段のぼっていく努力をしたのです。

保己一が江戸に出て、一座に入門したのが十五歳のときのことです。最高位の検校になったのが三十八歳でした。音曲（三味線・琴）、鍼按（はり・あんま）、それに座頭金（金貸し）といった職業を選んだ盲人とは違って、前例のない学問の道に進んだ保己一は収入の道がまったく閉ざされていました。それにもかかわらず、異例ともいってもよい早い出世をしたのです。

他の仲間たちよりも人一倍早い出世をした保己一は、学問の目覚ましい進歩が評価されたからだと考えたいところですが、それは直接の理由ではありませんでした。出世できるかできないかは、高潔な人格者であるとか、芸能や治療の高い技術があるかということとは関係ありませんでした。すべてお金なのですから。

なぜお金に縁のない保己一が、大金を積まなければならぬ検校の座に就くことができたのでしょうか。なぜ多額のお金を積んでまで高い地位を手に入れようと考えたのでしょうか。この秘密を知ることが、保己一という人物を理解するうえで、大きな鍵になってきます。

それでは、いくらお金があれば、最高の検校の位が手に入ったのでしょうか。また、保己一はその大金をどうやって、工面したのでしょうか。一文のお金にもならない学問の道をひたすら歩んだ保己一が、なぜ盲人の最高の位を多額のお金を払い込んでまで手に入れようとしたのでしょうか。清廉潔白で、地位やお金に無頓着であったといわれる保己一がなぜ?…疑問は次々と浮かんできます。

第十二章で葛原勾当美濃一くすはら みのいちという琴の名人のことを紹介しますが、この人物は裕福な家庭に生まれ、経済的にも恵まれていました。しかし、大金をはたいてまで検校という地位を手に入る意味はないと考えたのです。そして、あえて検校になろうとはしないで勾当で一生を終えました。

検校の地位を手に入れるまでには、実に七百数十両という大金を積んでいかなければなりませんでした。当時の正確な貨幣価値はわかりませんが、「十両盗めば首がとぶ」といわれた時代のことです。

保己一が二十一歳のときのことですが、師匠に出していただいた五両のお金で、父親と二人で二ヶ月にわたる関西旅行ができました。このことから当時の人たちにとっては、途方もない大金だったことが推測されます。

しかも、この官位を手に入れるための上納金じょうのうきんは、全国の盲人一座の総元締めである京都の職検校の屋敷まで、その都度届けることになっていました。仲間と連れだって出かける旅費など

の諸費用を合わせると、実際、検校になるには千両近いお金がかかったといわれています。

江戸の人たちは、盲人社会では想像もつかない多額のお金が動くことに目を見張り、「検校千両」などと陰で噂しました。

実際にこんな極端な例もあったといわれています。ある資産家の息子が盲目であったので、一度にこの多額の金を親に出してもらい、あたかも一晩で検校になってしまったというのです。世間では「一夜検校」とささやかれていました。

### 狂歌に詠まれたその活躍（かり）

保己一が江戸に出るとき、父親が母の形見の巾着に入れて持たせられたお金はたったの二十三文！——《二八にはちそば》という言葉があります、かけ算の二かける八は十六ということから、安いお金で食べられるそばの意味で使われたともいわれています。驚いたことに、江戸では二百年もの間、そば一杯の十六文という値段は変わりませんでした。

この時代、保己一の生まれ育った村も度重なる洪水と干害かんがいによって農家は皆疲弊していたのです。戸惑いながらも、盲目の息子の江戸行きを父親が許したのには《口減らし》の意味もあったのかもしれない。

三十歳のとき、保己一は検校に次ぐ高い地位である勾当に進んでいます。この時、弟子の昇

進を願って百両もの大金を出してくれたのは、盲人一座の師匠、雨富検校でした。

当時の社会では、この検校に次ぐ《勾当さま》というだけでも世間の評価は大変なものだったといわれています。しかし、この地位に就くには、なんと倍の二百両ものお金が必要でしたから、師匠に出してもらった百両のお金だけでは足りません。不足のお金は一体どうしたのでしょうか。実は、その裏に保己一を支援してくれた多くの人たちがいたのです。

ところで、同じ盲人仲間の人たちは、収入もないのに自分たちを追い抜いて、あれよあれよという間に出世していく保己一を見て、反感をいだいたり、嫉妬したりする人はいなかったのでしょうか。不思議なことに、保己一を妬んだり、批判したりする声はどこからも聞こえてきません。それどころか、身分を問わずその活躍に拍手をおくる人たちが大勢いたのです。

当時の盲人社会では、想像さえできなかった字問という新しい分野で活躍する保己一の姿は、まさに《希望の星》といってもよいものでした。自分たちのかなわぬ夢を保己一に託したのでしょうか。

こうして、勾当になるために必要な金額の不足分は、多くの理解ある人たちの手によって寄せられたのです。一銭でも多くのお金を蓄えて、早く出世することを夢見た盲人の一座の仲間たちでさえ、保己一の昇進のために、進んで協力したのでした。のちに勾当から最高位の検校に昇進するときも同じでした。

番町に過ぎたるものは二つあり 佐野の桜に塙（花は） 検校

こんな狂歌きょうかが、当時の江戸市民の間で口にされるほど、だれからも慕われた保己一ほごいちでした。仲間の盲人たちも、さぞかし鼻が高かったことでしょう。ここに出てくる「佐野」とは地名ではなく「佐野善左衛門政言まさよと」という旗本武士の屋敷のことで、善左衛門は当時江戸一番の人気者（？）でした。

全国各地が飢饉に見舞われ、庶民が貧困あえに喘いで明日の食事にも事欠いているなか、田沼意次おきと・意知親子が権勢をふるっていたのです。そのような折、佐野善左衛門が江戸城内で息子の意知に斬りつけ、殺してしまうという事件が起きました。その結果、善左衛門は切腹を命じられたのです。

しかし、このことがきっかけで田沼政治は終わりを告げ、江戸の町に平穏な生活が戻りました。人々は「佐野のお殿様のおかげで命が救われた」といって、「佐野大明神、佐野大明神」とあがめたのです。浅草の徳本寺にあるお墓には線香の煙が絶えることはなく、その人気は絶大なものがありました。多くの参拝者が押しかけたため、騒動に発展することを恐れた幕府は墓参りを禁止したほどでした。

この《時の人》であった江戸一番の人気者と並んで塙保己一が人々から敬愛されていた様子を詠んだのがこの狂歌というわけです。どんなに人々から慕われ、愛よされていたかがわかります。

その人気の秘密は、保己一の生き方そのものにあつたといってもよいでしょう。どんなに学者として有名になっても、また旗本同等の高い地位に就くようになっても、その心は常に仲間



である盲人たちや町の人々と共にあったからです。

高利の金貸しによって羽振りのよい検校たちが、お供を連れ、派手な紫の着物に身をつつみ、籠かごに乗って繰り出す光景を見慣れていた江戸の人たちは、評判の高い保己一が風呂敷に包んだ書物を背に負い、お供も連れずに、杖をたよりに歩く姿を目にして、その人柄に心をひかれたことでしょう。

毎日の食事は粗末な一汁一菜いちじゅういっさい、寺子屋の子どもが使うのと同じ白木の天神机てんじんつくえに向かって講義をしている大学者の姿を身近に見て、親しみをおぼえたにちがいありません。

### 無私の心で

お金のない保己一が、高額のお金を納めてまで、手に入れることになった検校という地位とは、一体なんのためだったのでしょうか。金銭に淡泊で、清廉潔白であったといわれる保己一を考えると、この買官制度のもとでの官位取得は、まさに「謎」といってもよいのではないのでしょうか。

身分制度の厳しい封建時代にあつて、盲人だけはお金次第で旗本武士にも相当するといわれる検校にもなれたのです。さらに、盲人の副業として、幕府から特別に認められていた座頭金という高利の貸金業で私腹を肥やす者も少なくありませんでした。なかには世間の常識を越え

た贅<sup>ぜい</sup>を尽くし、横暴な振る舞いをする検校もいました。

この時代、全国的に繰り返し襲った飢饉に苦しんでいる人々をよそに、贅沢を極め、思い上がった検校の振る舞いがしばしば話題になり、人々のひんしゆくをかっていました。保己一は同じ盲人仲間としてこのことに心を痛めていました。

こうした背景を考えると、検校という肩書きだけでは、必ずしも人々から尊敬される「偉人・塙保己一」という評価はできません。

保己一の願いは、日本古来の貴重な文化を絶やすことなく、後世に確実に伝えていくことであり、学問を志す一人でも多くの人たちに、その便宜をはかることでした。決して自分が有名になることでも、高い社会的地位につくことでもありませんでした。ましてや財を築くことでもありませんでした。

「世のため、後のために」を考えて、ほかの学者は誰も手を出そうとしない大文化事業に、困難を覚悟であえて取り組んでいったのです。

江戸に出たばかりの保己一は、出世や学問にしても、「自分のこと」だけを考えて、あれやこれやと思い悩んだのでした。草履<sup>ぞうり</sup>取りから関白<sup>かんぱく</sup>太政大臣<sup>だいていじん</sup>までになり、天下を統一した出世<sup>しゅつせ</sup>頭の豊臣秀吉を自分の守護神としようと考えたのも、その頃でした。

しかし、その後、慈愛に富んだ一座の雨富検校夫妻との出会いにより、人生観は一変しました。自分のことだけでなく、ほかの人たちのために生きようと決意したのです。無私<sup>むし</sup>の心、

常に感謝し徹底した謙虚な生き方を支えたのは、人々の厚意と自殺未遂事件をきっかけに心の拠り所となった「般若心経」はんにやしんぎょうでした。

ですから、多くの人たちから敬愛され、その結果として、学者としての名声や盲人最高位である検校という地位が与えられても、それでよしとするものではありませんでした。

旗本武士にも匹敵し將軍様にもお目見えできるという晩年の高い身分は、学者としての名声とともに、保己一の貴重な書物の開版事業を推進するうえで大いに役立ったのです。保己一は自分のためではなく世の中のために、むしろこの地位を意識的に利用したと言ったら言い過ぎでしょうか。

幕府はもちろんのこと、高い身分の公家や大名家、古くからの寺院などの文庫の奥深くに大切にしまい込まれた「門外不出の貴重な書物」は、一介の学者では、とても借り出すことはできません。幕府の保護のもとに、旗本や大名にも匹敵する検校という地位にあつてはじめて、保己一はこうした貴重な文献を手にし、事業をすすめることができたのです。

六百七十冊にも及ぶ『群書類従』をはじめ、出版事業にかかる何百両、何千両という膨大な費用を、どうしたら調達することができたのでしょうか。この莫大な資金は幕府や大名、それに大商人からの借金に依存したのですが、それにも検校という肩書きによる信用が大いに役に立ちました。

『群書類従』等、数々の貴重な書物の出版や、我が国唯一の公的な国学の研究・教育機関であ

る和学講談所の創立と経営の成功の裏には、単に高名な学者という名声だけではなく、検校の地位の果たした役割が決して小さくはありませんでした。

こうして、お金や財産、名誉や権力に淡泊であった保己一が、我が国の文教政策にまで大きな影響を及ぼす事業をやり遂げることができたのです。

こんなことを振り返ってみると、自分の好きな学問さえできれば、ほかのものは何もいらな  
いと考えていた青年時代の保己一が、この文化事業を進めるために、周囲の人たちの勧めに従  
って、検校という地位に就いたことも、決して不思議ではありません。

ですから、検校という盲人一座の高位に就き、当代随一の学者としての名声を博すようにな  
っても、驕ることもなく、それまで同様に江戸の市民や盲人一座の仲間とともに、つつましか  
かな人生を歩んだのでした。

● 講釈師になりそこなつた塙保己一

塙保己一は子どものとき、近所の寺の手習い師匠であつた和尚さんから『太平記』たいへいきを読んで面白い、歴史に興味をもつようになりました。そして、当時人気の「太平記読み」という話芸で生きていくことを夢に描いて江戸に出たといわれています。

学問が好きといわれていますが、目の不自由な少年にとつて、学者になることは夢のまた夢であつても、この太平記読みは現実的なものに思えたのでしょうか。しかし、その夢もかなわぬことを知つた十六歳の盲少年は、自ら命を絶とうとしたのです。

この太平記読みほのちに「講釈」こうしゃくとなり、明治になつて「講談」こうだんに発展しました。ですから、保己一の少年時代の夢が順調にかなえば、今でいう講談師になつていたにちがいありません。

皮肉なことに、講談師になる夢は破れましたが、自殺未遂事件をきっかけに、学者になる道が開けたのです。「人生万事塞翁が馬」ということわざが当てはまる保己一の一生でした。「禍福は糾える縄の如し」です。

講談を語る側にはなりませんでしたが、その生涯は演目に取りあげられ、多くの講談師から「塙保己一と根岸肥前守―出世競べ―」として今日まで語り継がれてきました。

他にも講談の主人公として登場する盲人は少なくありません。いくつかの演目を紹介し、当時の盲人が大きなハンディキャップを抱えながらも、たくましく生きた《生きる力》の持ち主であったことに目を向けてみましょう。「はりの神様・杉山検校」については十六章で紹介しします。

### 「米山検校（男谷検校）」

幕末から明治にかけて活躍した政治家、勝海舟の曾祖父として知られています。越後の農民の出である米山検校銀一は江戸に出て、鍼治療で名をなし、その儲けを元手に貸金業を営みました。そして、旗本男谷家の株を買い、息子に後を継がせ、その三男をさらに旗本の勝家に養子に出し、そこで長男として生まれたのが勝海舟というわ

けです。

しかし、米山検校はどんなに出世しても単なる自分の利害だけを優先するような人ではありませんでした。故郷の盲人のために盲学校設立に努力し、宝暦の飢饉のときには、多額の資金を提供し越後の人たちの窮乏を救ったのです。現在の柏崎市東長鳥ながとりには「米山検校御礼塔」が三つも建っているそうです。

講談ではその人となりをこう伝えていきます。

「生涯絹布を身につけず、黒木綿の紋付もんつきと小倉こくらの袴はかまで過ごし、貧乏人を見ると着ているものまで惜しまず与えてしまう。これを生涯続けたというから実にえらい。金貸しを営んでいたが、死ぬ寸前には貸金の帳面を枕元に集めて、すべて焼いた。見上げた人物である」

### 「玉川上水の由来」

江戸の町が必要とする水は神田上水だけでは足りず、玉川から江戸の入口までの十一里あまりの水路工事を、玉川村の農民・清右衛門と弟庄右衛門の兄弟が人足を使つて行っていました。しかし幕府から与えられた資金は底をつき、人足の賃金を払うため先祖代々の田畑、山林等はすべて売り払い、村一番だった身代は何も残っていま

せん。

あと一里足らずの工事が残っていましたが、賃金の未払いが続き、人足たちは賃金を払わないなら水路を打ち壊すと暴動に発展しそうな状況におかれたのです。

兄弟は賃金を要求する人足たちと争っていました。この噂を聞きつけた盲人の松のいち一は、自分が検校になるために三十年もかけ苦勞して貯めた全財産三百両を黙まって差し出したのでした。工事は再開され、ついには四谷大木戸よつやおおきどまでの水路は完成し、それが現在の玉川上水です。

この功績により兄弟は幕府から玉川の姓を名乗ることを許され、士分しぶんにとりたてられるとともに、二百石を与えられました。兄弟は恩人の松の一を探しましたが、行方はとうとうわかりませんでした。無名の盲人の奇特な行為は「玉川上水の由来」として今日に伝えられています。

第十六章で紹介する盲人の鍼按の祖ともいべき杉山和わいち一は講談の格好の演目として、「本所の総録屋敷」「杉山検校の一目拝領いちもく」等として多くの講談師によって演じられてきました。最近、落語でも林家時藏ときざうによって「杉山検校」が演じられています。他にも、講談には多くの盲人が登場し、当時の盲人がいかに活躍したか、その様子を知らることができます。



●  
「藪原検校」

よい話ばかりではありません。金のためなら人殺しも行うという極悪非道な藪原検校の話も講談の演目になりました。今日では井上ひさしの脚本で、同名の戯曲が全国で上演され、好評を博しています。

宇野信夫の脚本により、勝新太郎が主演した映画『不知火検校』も同様のテーマがあつかっています。杉の市という座頭が殺人・強盗・ゆすりと、悪行の限りをつくして金を貯め、検校に出世し、ついに破滅する話です。

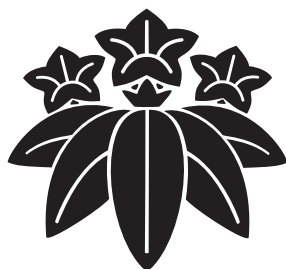
盲人一座で出世するにはすべて金という買官制度のもとで、せっせと蓄財に努めた盲人の姿から、『守銭奴』という盲人のイメージが出来上がってしまったのかもしれない。

しかし、単にマイナスイメージに目を向けるのではなく、差別という厳しい状況のもとで生きていかなければならなかった障害者のたくましい一面も評価されなければならないと、私は思っています。

第Ⅱ部……世のため、後のために

## 第十章

### 明治の工業立国の父と 盲学校の設立



塙家の家紋（ササリンドウ）

#### 和学講談所衰退の一因とは

塙保己一の業績は、日本に古くから伝えられ、ややもすれば散逸するおそれのある貴重な文献や書物を出版して後世に伝えたことと、日本の歴史や律令制度を研究するための和学講談所を設立し、学問の振興をはかるとともに後進の育成をしたことでした。多くの困難を伴いながらも、この二つの事業は順風満帆に進んでいたのでした。

しかし、保己一には大きな悩みが一つありました。それは後継者がなかなか決まらないこと

でした。あとを継いだのは、結局、保己一が六十二歳の時に生まれた四男の次郎（忠宝）ただよ）でした。この一大文化事業を継いだのは年端とじはもいかないう少年だったのです。

大学者のほまれ高い保己一を父に持った次郎は、その重臣に耐えて、多くの人たちの力を借りながらも、その事業を継いでいったのです。青息吐息あおいきといきで事業を引き継ぎ、その努力の甲斐かひがあつて、どうにか軌道にのり始めた五十六歳のとき、何者かに暗殺されるという突然の不運に見舞われました。

一体だれが、何のために、こんな事件を起こしたのでしょうか。それは過激な攘夷論者じょういである長州の青年浪士ろうしたちの一時の高ぶった感情によるものでした。

ある晩のこと、ササリンドウの塙家の家紋の入った提灯ちようちんを片手に、屋敷近くまで戻ってきた次郎に、二人の男が「天誅てんちゆうだ！」と叫びながら斬りかかり、殺害したのです。事件の翌朝、九段坂上に、犯人によって罪状を記した立て札が立てられていました。

それは「塙次郎は天皇を廃位はいいさせる方法について調べまわっている不忠の臣だから、天に代わって罰を加えた」というものでした。これは明らかに誤解にもとづいた暴挙でした。文久二（一八六二）年十二月十二日の夜半のことでした。

この激動の時代、江戸や京都では浪士による天誅事件が相次ぎ、このような暗殺事件が繰り返されていきました。武士による「切り捨てご免」がいまだにまかり通っており、この事件の捜査もあまり行われず、その時は犯人もわからずじまいでした。

大黒柱を突然失った和学講談所への影響は甚大でした。とうとう明治維新とともに、その役割を終えることになりました。

### 明治維新の混乱のなかで

徳川幕府は、それまでの政権を朝廷に返上し、幕を閉じました。この明治維新によって、わが国は新しい政治機構のもとで近代国家への第一歩を踏み出したのです。

しかし、外交、政治、経済、文化、教育等のあらゆる面で、解決しなければならない緊急な課題が山積していました。むしろ大きな混乱のなかでの新時代の幕開けでした。

すべての国民が教育を受けなければならぬとする「学制」が発布される前の年の明治四（一八七二）年、政府の高級官僚の一人であった山尾庸三（やまおようぞう）という人物が盲（あま）学校設立の建白書（けんぱくしょ）を政府に提出しています。一般の教育制度が確立される以前に、障害者のための学校を設立するように強く政府に求めたのです。

この建白書の概要を紹介します。

「我が国には、多くの貧しい盲人や聾啞者（ろうあしや）がいて、人の慈悲にすがって生きているのが現状である。凶作の年には餓死することさえ避けられない状態で、同情に耐えない。西洋では盲人や聾啞者であっても、学校教育を受け、一人前の技術をしっかり身につけ、一市民としての責任

を果たしている。日本でも盲学校と聾学校を設立し、盲人や聾啞者に教育をさずける必要がある……」

この建白書に見られるように、国そのものが危機的状況にある時代に、敢えて障害児教育に熱い思いを注いだこの人は、どんな人物だったのでしょうか。そして、その動機は一体なんだったのでしょうか。

この山尾庸三は、吉田松陰を師と仰ぐ熱血の青年でした。江戸時代も間もなく幕を閉じようとしていた文久三（一八六三）年、吉田松陰の松下村塾（しょうかそんじゅく）の門下生であった若き日の伊藤博文や井上馨らとともに、イギリスに留学したのです。保己一の後継者、塙次郎が暗殺された一年後のことでした。

造船技術を学ぶかたわら、彼らがそこで見たものは、聴覚障害者が造船所の技術者として、健常者とともにまったく同じように働いている姿でした。

実は、山尾が師と仰いだ吉田松陰の実弟・杉敏三郎（としきさぶろう）は聾啞者で、その生活の様子を身近に見ていました。才能がありながら、耳が聞こえないというだけで、毎日の生活は、気休め程度の針仕事などをして、ただ時間をつぶしているかのように見えたのです。

「イギリスと日本のこの違いは何だろう」と考えた山尾は障害児への教育の必要性を痛感したのです。日本へ戻った山尾は、間もなく役人として、明治政府に高級官僚として迎えられ、工学関係の人材育成に貢献し、後に「明治の工業立国の父」とよばれるようになりました。

しかし、当時の日本には、解決しなければならぬ課題が山積し、とても障害者のことに目を向けられるような時代状況にありませんでした。現に、この建白書が提出された明治四年には、幕府のもとで長年保護されてきた《当道座》といわれた盲官<sup>もうかん</sup>制度が、新政府の一片の布告によって一方的に廃止されたのです。

その結果、それまでの生活の糧<sup>かて</sup>を得る道と精神的支柱の両方を一度に失うことになり、路頭に迷う盲人も少なくありませんでした。

こんな困難な時代に、山尾に自分の専門の工学とは縁遠い盲（啞）学校設立の建白書を政府に提出させるよう駆り立てたものとは、一体何だったのでしょうか。

### 事件の真相は

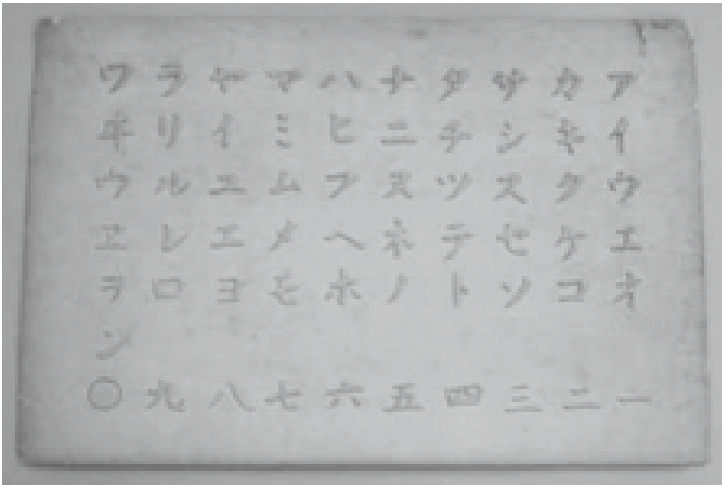
話は戻りますが、保己一の後継者を暗殺した犯人が明らかになったのは、事件から六十年も経った大正十二（一九二三）年六月十二日のことでした。塙保己一百年祭の席で、渋沢栄一の口から、会衆にこの事件の真相が語られたのです。

驚いたことに、犯人の一人が、わが国初代の総理大臣・伊藤博文、そして、もう一人が盲学校と聾啞学校の設立とその後の支援に異常とも言えるほどの情熱を傾けてきた山尾庸三その人だったのです。



山尾庸三写真

出所：東京盲学校六十年史筑波大学附属視覚特別支援学校收藏品



盲啞学校の設立に尽力し、山尾庸三がその製造に力を入れた凸字教科書  
(教授用)

出所：筑波大学附属視覚特別支援学校收藏品



伊藤博文が、この暗殺事件にどのような思いをいだいていたかは知る由もありません。後に中国の黒竜江省のハルビンで朝鮮の独立運動家安重根アンジュンケンによって暗殺されました。

一方、山尾は、後悔しても後悔しきれなかったにちがいません。若いときの過ちとはいえ、この二人の犯人は、盲目の保己一がやっとの思いで築きあげた事業の後継者を、自分たちの早とちりから殺してしまうという大きな過ちを犯してしまったのですから。

維新直後で緊急課題が山積しているなか、あえて障害児のための学校設立を維新政府に訴えるという行動に出た山尾の心中しんちゅうは察するに余りありません。

もちろん、建白書を政府に出したからといって、すぐに実現したわけではありません。しかし、四年後には盲学校の設立の準備が始まり、明治十一（一八七八）年には、我が国最初の障害児学校として京都盲啞院が、その二年後に、東京に樂善会訓盲院らくぜんかいくんもういんが設立されます。いずれも私立学校として出発したものの、経営面で困難を極め、廃校にするか、早くも公立学校への転換が求められたのです。

この時、文字通り東奔西走とうほんせいそうし、陰ながらこの障害児教育の維持・発展に尽力したのは山尾庸三その人でした。この二校は現在の京都府立盲学校と筑波大学附属視覚特別支援学校の前身です。『東京盲学校＊六十年史』には、訓盲院創立発起人として、子爵山尾庸三の写真が紹介されています。そのけわしい表情のなかに、この教育にかける意気込みが感じられます。

＊註：東京盲学校の名称について 唯一の国立の盲学校である筑波大学附属視覚特別支援学校

(通称「附属盲学校」)は私立学校として発足し、その後国立学校になったが、何度か名称が変更されて今日に至っている。

明治十五年「楽善会訓盲院」↓明治十七年「楽善会訓盲啞院」↓明治二十年「東京盲啞学校」(文部省直轄)↓明治四十二年、東京盲啞学校を分離して「東京盲学校」↓昭和二十五年「東京教育大学附属盲学校」↓昭和五十三年「筑波大学附属盲学校」↓平成十九年「筑波大学附属視覚特別支援学校」(現在に至る)。

なお、「盲啞」という言葉に見えられるように、明治期は盲教育と聾教育が常に一体となっておこなわれていた。

生前、山尾は自分が犯したこの事件について口外することはありませんでした。ただひたすら我が国の盲聾教育の発展に側面から援助し続けたのです。山尾が世を去って九十年が過ぎ、現在の日本の視覚障害教育の隆盛と塙保己一の後継者をめぐる事件との不思議な因縁を顧みずにはいられません。

第Ⅲ部……保己一に続く人びと

### 第十三章 心で見た ヘレン・ケラー

#### 高橋竹山のことばから

平成十（一九九八）年津軽三味線の名人・初代高橋竹山ちくざんが八十七歳で亡くなって、はや十年以上が経ちました。盲目の竹山は私たちに津軽三味線の素晴らしさだけでなく、人の生き方そのものをも教えてくれた人でもありました。

暑い日も寒い日も三味線を抱え、門付けかどづをして回った苦しい時代を経験した盲目の竹山です。のちに三味線奏者として全国的に有名になっても、常に謙虚に、しかも堂々と自分に忠実に生



きた人でした。そして、こう言っています。

眼の見える人は、眼の見えない人を気の毒に思うべけど、私にいわせれば反対に、眼の見えるのも不自由なもんだな、と思うときもある。眼が見えるからかえって余計なものまで見てしまって、それでなにかも見てしまったような気になる。ところが、ほんとはなにも見えていない。衣裳がきれいだったとか、照明がかわっていたということは言うけど、演奏はどうだったときけば、うん、どうであったっけ、という人もいる。

（佐藤貞樹著『高橋竹山に聴く』集英社新書）

自分は「目が見える」「耳が聞こえる」ために、視覚障害者や聴覚障害者よりもいろいろなことがよくわかっているという思い込みから、実は一番大切なものを見落としてしまっている……私自身そんな自分の姿を竹山に指摘された思いがして恥じいるばかりです。

「眼の見えるのも不自由なもんだな」という竹山の言葉にハッとさせられたのは私だけでしょか。

卑下せず、驕らず、ありのままに生きた保己一

明治の初めに発行された修身（道徳）の指導書や小学生用の国語教科書には、すでに塙保己一が登場しています。それ以来いろいろな教科書が発行されていますが、いずれも学問上の大きな業績に加えて、次のエピソードを紹介しています。

### 第十七 塙保己一

目は見ゆれども、字のよめざる人をあきめくらといふ。昔はあきめくらも多かりしに、まことのめくらにして、大學者となりし人あり。塙保己一これなり。

保己一は五歳の時めくらとなりしが、人に書物をよませて、一心に之を聞き、後には名高き學者となりて、多くの書物をあらはせり。

保己一の家は今の東京、その頃の江戸の番町にありて、多くの弟子保己一につきて學びたれば、時の人

番町で目あきめくらに道をきき。

と言ひたりといふ。

或夜弟子をあつめて、書物を教えし時、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。保己一

はそれとも知らず、話をつづけたれば、弟子どもは

「先生、少しお待ち下さいませ。今風で明かりがきえました。」

と言ひしに、保己一は笑ひて、

「さてさて、目あきといふものは不自由なものだ。」

と言ひたりとぞ。

(昭和三年版『尋常小學國語讀本卷八』)

註：教科書中の「めくら」という言葉は、今日においては不快語として避けるべき語ですが、

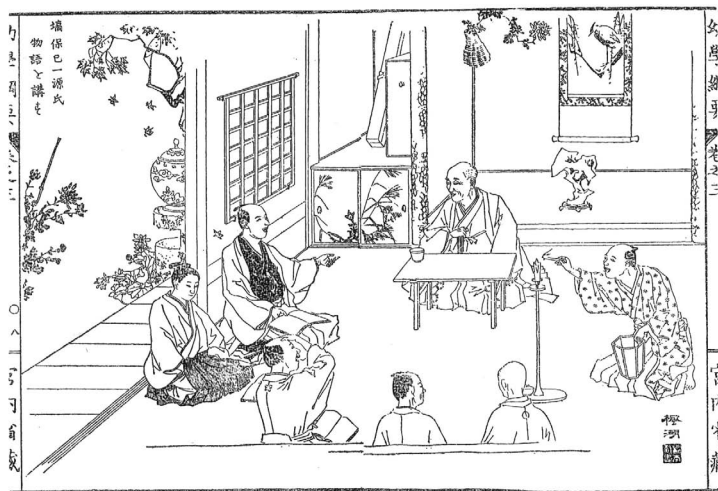
歴史資料として、そのまま引用しました。むしろ保己一に対する敬愛の情を表す意味で、

この川柳は折にふれて引用されてきました。

ヘレン・ケラーは、いつ中国と日本との間に戦争が始まるかという暗雲たちこめる昭和十二(一九三七)年、初めて来日しました。そして、各地で行われた講演の中で、埴保己一を心から尊敬し、幼いときから人生の目標にしてきたことを語りました。

そして、意外なことに、この「ローソクが消えたときのエピソード」が、特に強く印象に残っていると言っているのです。こんな小さな逸話が、昭和のはじめに遠く地球の裏側のアメリカのヘレンのもとまで伝えられていたとは驚きです。何が彼女の心をとらえたのでしょうか。

この教科書の記事について、ある人はこんなふうに批評をしています。



「堀保一『源氏物語』を講ず」の図(1)——『幼学綱要』(明治15年宮内省刊行)に掲載された画。門人の中に盲人と思われる人物(前列右端)のいることが注目される

「保一ほどの人物でも、やはり目が見えないという劣等感から負け惜しみを言っているのではないか」

しかし、たくましく生きた高橋竹山の「眼の見えるのも不自由なものだ」のことばにも共通する保己一の「さてさて、目あきといふものは不自由なものだ」という言葉は、どうも強がりなどではなさそうです。

ここには、どうしてもこれだけは門人たちに伝えておきたいという保己一の深いメッセージがありました。この逸話に見られるように、折にふれ、ユーモアを交えてその思いを伝えていたのです。それでは、保己一が真に伝えたかったメッセージとは一体何だったのでしょうか。

江戸時代中期の哲学者、三浦梅園は次





「塙保己一『源氏物語』を講ず」の図(2)——『尋常小學國語讀本卷八』(昭和3年版文部省刊行)に掲載されたものであり、以降、終戦まで小学4年生の教科書にはこの画が載った。

の言葉を残しています。

- 一 学問は臭き菜のようなり。とくと臭みを去らざれば用いがたし。少し書を読めば少し学者臭し。余計書をよめば、余計学者臭し。こまりものなり。
- 一 学問は置きどころによりて善悪わかる。臍へその下よし。鼻の先悪し。
- 一 足の皮はあつきがよし。つらの皮は薄きがよし。

〔梅園拾葉〕巻下

「自分は天下の大学者・塙保己一先生の門下生で、多くのことを学んでいる。学問のないほかの連中とはちがうのだ」と思いあがった者が弟子のなかにいるかも

しれない。そんな空気を感じて、「学問をしようとする者は謙虚でなければならぬ」ことを、保己一は日頃伝えようとしていたのではないでしょうか。実際、多くの弟子のなかにはそのような不心得者がいることを感じて、心を痛めていたのかもしれない。

三浦梅園が学問をする若者に警告しているように、保己一も「学問を修めている自分こそ、いわゆる《目あるの者》（分別をわきまえた知者）」とうぬぼれることのないように弟子たちを論じた逸話だったと思います。

「智恵のある馬鹿に親父は困り果て」という江戸川柳がありますが、バカ息子の浅知恵ではなく、仏教でいうところの真の「智慧」を身につけることを門人に期待していたのでしょう。

ヘレン・ケラーはこの逸話から、保己一のこのメッセージを見えぬ目で、心の目で読みとり、ことのほか印象に残っていたのだと思います。

保己一は、身分を問わず江戸市民の間で親しまれ、人気がありました。その秘密は、幼くして失明したにもかかわらず、努力のすえ学者として名をあげ、晴眼者でも困難と思われた大事業を成し遂げたという立志伝中の人物ということもあったでしょう。

しかし、人々の心をとらえたのは、むしろ制約の多い封建時代にあっても、常に自分自身を見失わずに、一見自由奔放ともいえる保己一の生き方そのものにあつたのではないかと思えます。厳しい身分制度のなかにあつて謙虚な生き方の一方、あたかも「精神的自由を謳歌している」かのような生き方に拍手をおくつたのです。

例えば、学問所を経営し、多くの貴重な書物を出版するには、何千両という多額の費用が必要でした。また、貴重な書物を借り出したり、写し取ったりするには、これらの持ち主である身分の高い人たちの理解と協力がなければ成し遂げられるものではありません。

保己一の最大のスポンサーは幕府や諸大名、それに豪商たちでした。しかし、この人たちに對して、少しも卑下することも、へつらうこともなく、常に對等に渡り合ったのです。ましてや学問をすすめるうえで、支援者の機嫌をとることもありませんでした。

將軍や幕府によって代表される武士に関連する文献や書籍などの「武家部」は『群書類從』の終わりから三番目の二十三番目に置いたのです。將軍や武士だからと言って、大スポンサーだからといって神々に関する一番目の「神祇部」、続く天皇に関する「帝王部」の次の三番目に置こうとはしませんでした。だればばかることなく自分の学問的良心に従ったのです。

人々は、こんな保己一の生き方に、心から拍手をおくりました。封建時代の厳しい身分制度の殻を破ったとも言える保己一の姿に、江戸市民は自分たちの憧れの姿を見たのでしょうか。当時、学問をする者のなかには、師匠の説を鵜呑みにし、それがあたかも自分の考えでもあるかのように得意げに吹聴する者や、学者としての良心をも捨てて、時の権力者におもねり、「曲学阿世の徒」と陰口をたたかれる者もいたのです。

保己一の生き方は、これとはまったく對照的に、なにごとについても先入観にとらわれず、心の目で見て、自由な立場から判断を下すのでした。

## 視力を超えた「視力」

保己一は「少しばかり学問をかじって、自分はものが見える、ものの本質が分かったと思ひ込むことは、だれもが陥りやすい過ちだから、常に心しなければいけない」と、あらゆる機会をとらえて弟子たちに伝えたかったのでしょう。その姿勢こそが学問をする者に大切だと考えていたからです。学者である前に、真の教育者でもありました。

ヘレン・ケラーも、その著書の中で、目の見える人は、視力に頼り過ぎて、ことの本質を見落とすことがあると云って、「視力を超えた視力」で、ものを見る大切さを強調しています。

戦争が激しくなった昭和十九（一九四四）年、三味線弾きでは生活していけなくなった高橋竹山は、将来のために《あんま》や《はり》の技術を身につけようと、三十四歳で青森県の八戸盲啞学校に入学しました。その在学中に、盲学校の教科書に載った保己一のエピソードやヘレン・ケラーのことを耳にする機会もあったにちがいません。

今、国の内外では、多発するテロとその報復合戦、若者たちのいじめ、暴力、自殺等々、人の命に関わる課題が山積しています。私たちは、今こそ冷静に世の中の動きを観察することが求められています。

ところで、明治四十年代になると、ほんの数年の間に、全国に盲学校が一挙に三十校以上も

新設されます。障害者への理解が進んだ結果でしょうか。実は、これには喜んでばかりいられない事情がありました。

というのは、その一因が日清・日露の戦争で兵士のなかから多くの失明者を出し、その救済策として盲教育や聾教育が必要になったからでした。戦争による失明者を一般の盲人と区別して「戦盲」と呼び、その職業自立を支援しなければならなかったのです。戦争に勝って、人々が提灯行列などお祭り騒ぎに酔いしれていた裏には、多くの犠牲者と嘆き悲しむ家族がいたことを忘れてはなりません。

ものの表面だけを見て、心の目で本質を見失っている門人たちに対して、「見えるということとは不便なものだ」といった保己一の言葉に共鳴したヘレン・ケラーの真意はどこにあったのでしょうか。

ヘレン・ケラーが来日した目的は、単に障害者福祉の向上や障害者理解を訴えるためだけではありませんでした。平和の必要性を訴え、軍国主義をひた走る日本に、どうかして戦争をやめさせようと、平和の使徒としての任務をおびての来日であったのです。

ヘレン・ケラーが日本を離れて間もなく、その心配をよそに、日本は無謀にもとうとう日中戦争、続いて第二次世界大戦（一九三七〜四五）へと突入していったのでした。

● ベル博士を驚かせた東洋の大学者の逸話

「ヘレン・ケラーは日本には全盲の学者である埒保己一先生が知っていることを知って、先生を目標に努力した」という話が広く伝えられています。今から、百二十年も昔、明治時代の話です。

母親は、折にふれ埒保己一を引き合いに出しては、障害の重圧に悩む娘を励ましたというのです。日本とは地球のちょうど裏側の田舎町に住んでいた母と娘です。どうしてはるか遠い東洋の盲目の学者のことを知っていたのでしょうか。

ヘレン・ケラーの最初の教師はサリバン先生ではなく、実は電話を発明したことで知られるアレクサンダー・グラハム・ベル博士でした。博士の本業は発明家ではなく、聴覚障害教育の専門家でした。音声の研究が電話の発明へと発展したのです。

また、盲学校を卒業したばかりのサリバン先生を家庭教師としてケラー家に紹介し

たのも博士でした。

聴覚障害教育の研究者である博士には一人の日本人の弟子がいました。当時の文部省から留学生としてアメリカに派遣されていた伊沢修二です。後に国立の東京盲啞学校校長を務めた人物です。

この二人の親密さを示すエピソードがあります。ベル博士が電話を発明し、最初の実験で話をした日本人がこの伊沢でした。後に来日した博士は伊沢の通訳で日本各地の聾学校で講演をしました。

この師弟は障害者問題についていろいろ話に花を咲かせたにちがいありません。イギリスからアメリカに移住したベル博士は伊沢に、『失楽園』等の長編叙事詩で人気のある故国の盲目の大詩人ジョン・ミルトンのことを、伊沢も負けずに盲目の大作家長編『南総里見八犬伝』なんそうさとみはつげんでんの著者である滝沢馬琴ばきんのことを互いに自慢しあったのかもしれない。

この二人の偉人は、ともに詩人として、また作家として世に名が売れてから中途失明をし、その後も困難な状況のもとで創作活動を続けたことで知られています。作家のベーターベンも中途失聴しゅつちやうで苦しみながらも『交響曲第三番 英雄』などの名曲を作曲したことで有名です。

一方、日本には、文字を学ぶ前に幼くして失明したにもかかわらず、『群書類従』

という大文献集を編集・刊行した塙保己一という大学者のいたことを、伊沢が鼻高々はなたかたかとベル博士に語っている様子が目に浮かんできます。ベル博士はこの話に特別興味をもったにちがいありません。

ヘレンの母親から娘の教育について相談を受けたベル博士は、この日本の偉人の話を話して聞かせたと推測されます。そして、たとえ目も見えず、耳も聞こえない子であっても、教育によって立派な人間に成長する可能性を秘めていることを説いて聞かせました。こうして重度の障害のある娘の子育てに悩んでいた母親に希望と勇気を与えました。

アメリカから帰国して、文部省の教科書の編集責任者になった伊沢は、修身の指導書で「勤勉」の例として紹介していた保己一を、日本文化の振興に貢献した人物として尋常小学校の国語の教科書に取り上げたのです。

単なる道徳の教材以上の人物として、日本人すべてに知ってほしいと考えたのではないのでしょうか。



第Ⅳ部……生きる力を身につけさせた教育

## 第二十章

### 目指すは共に学び、 共に育つ教育

「目あき」と「めくろ」

「視覚に障害のある人」を表すのにどんな言葉を使ったらよいか、私は、相変わらず迷っています。しかし、ここでは、江戸時代までのことについては「盲人」、明治以降については「視覚障害者」ということばを使うことを原則としました。「目が不自由な人」というような言葉では、自分の思いが伝えられないように感じたからです。

「盲人」という言葉そのものを否定する人、あるいは好きになれないという人がいることは承



「絵心経」の一部

知っていますが、その長い歩みを振り返ってみるとき、なかなかふさわしい表現がほかに見つからないのです。

マスコミ関係者が「偏見」や「差別」の問題を意識して、差別的表現あるいは不快語として使うのを避けたり、無理にほかの言い回しをしたりしている言葉があります。しかし、それらの言葉の歴史的背景に目を向けずに、ただタブー視して、避けて通るだけではなんの課題解決にもなりません。

こんな笑えない話を聞きました。当時の厚生省の役人が視覚障害者の団体と話し合いの機会をもったときのことです。障害者に対して失礼な言動があつてはいけないと頭にあつたのでしよう。役人は視覚障害者のことを何と呼んだらよいか、ふと迷ったのです。「役人が障害者に対して差別語を使った」となったら大変なことになる……。一瞬ことばをつまらせ、とっさに出てきたことばが「おめくらさま」……真偽のほどはわかりませんが、ある視覚障害者から聞いた話です。

あらためて身体障害に関する言葉について考えてみたいと思います。その代表的なものがこの「めくら」という言葉です。現在では日常生活ではほとんど耳にすることはありません。新聞やテレビなどでは、「目が不自由な人」「視覚障害者」などが用いられています。しかし、言い換えたからといって、この言葉がもつ問題性が解消されているわけではありません。

「めくら」という言葉が差別語として、今日指摘される理由ははっきりしています。それは、

「めくら」にしても、「盲」という漢字にしても、単に「目が不自由である」ということ以上のマイナスのイメージが付け加わって、用いられてきたからです。

例えば《あきめくら》《文盲》という言葉は、目が不自由であるかどうかとはまったく関係なく、「文字が読めない人」「教養がない人」の意味で使われてきました。また、ほかにも「分別を欠いた」という意味で《盲目的》という言葉や、「いい加減に押しつけた判」の意味で《めくら判》といったりする例は、今でも時々耳にします。

「盲」や「めくら」という言葉がほかの言葉と結びついて、「分別を欠いた」あるいは「いい加減な」という、視覚障害とはまるで関係ない悪い意味に使われているわけですから、こんな不条理なことはありません。

似たような問題を含む表現は、ほかにもたくさんあります。《盲愛》《盲信》《盲従》などで。ですから、私たち自身が人の尊厳をも傷つける言葉のもつ危険性に気づくことが必要です。ところで、保己一が、江戸の市民から親しまれ、愛されていたという証として、

番町で目あきめくらに道を聞き

という川柳がよく引き合いに出されます。「めくら」とは保己一のことです。戦前の小学校四年生の国語の教科書にも紹介されていました。

しかし、この「めくら」という言葉は、「めあき」の対語として用いられており、当時は差別的な意味合いは含まれていなかったでしょう。むしろ盲目の保己一に対する、人々の敬

愛の情がにじみ出ていて、だれに対しても、卑下せず、驕らず、ありのままに生きた保己一人となりうかがえます。

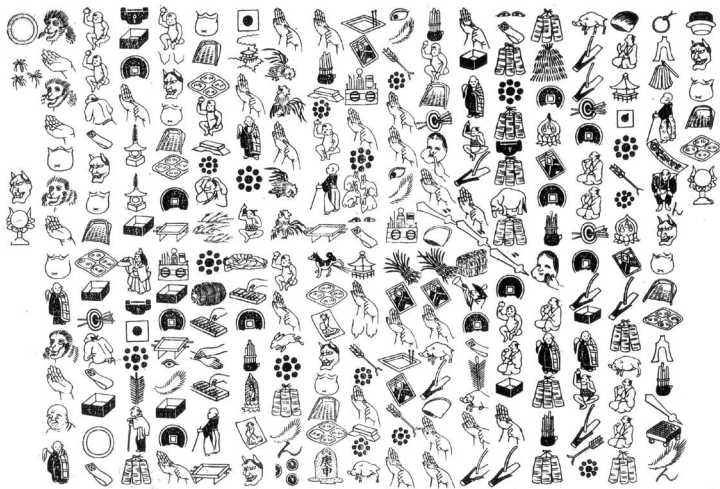
### 不快語の言い換え

高等部を設置している全国の視覚障害者の特別支援学校（旧盲学校）には、「あんまマッサージ指圧師」「はり師」「きゅう師」の養成課程があります。古く元禄時代からのこの伝統が、今日まで日本の視覚障害者の職業自立率を世界のトップレベルに押し上げてきました。

ところがテレビや新聞では、あんまという言葉が職業や人を指すとき、《マッサージ師》と言い換えられています。なぜでしょうか。理由も考えずに、あたかもこの言葉自体が差別語でもあるかのように、《マッサージ》に言い換えているとすれば、問題がありそうです。

一般にマッサージ師と呼ばれる資格は、正式には《あんまマッサージ指圧師》という国家資格であることを考えると、あんまを単純に異なる概念のマッサージに言い換えることはできません。

徳川幕府の盲人保護政策によって、我が国では「盲人」といえば《あんま・はり》、あんま・はりといえ「盲人」と言われるくらい互いに密接な関係にありました。今日、この職業に従事している人の数は、視覚障害者よりも晴眼者の方がずっと多くなって久しくなりますが、



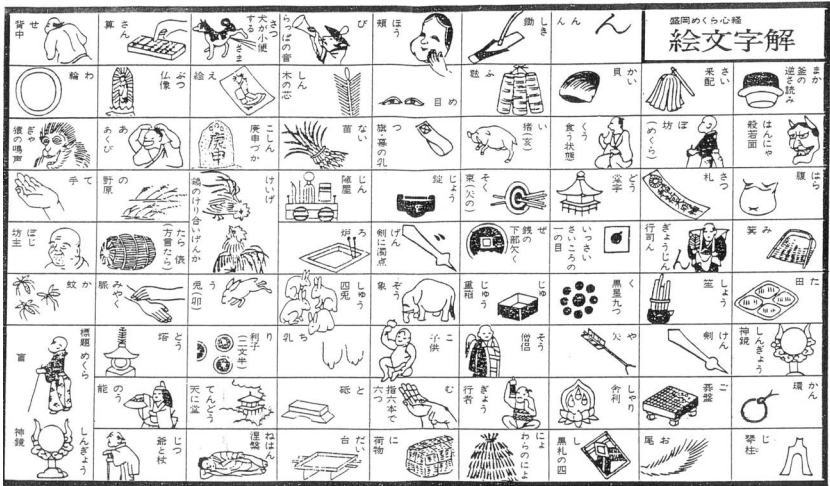
「めくら心経」といわれた絵心経

今でもあんまイコール「視覚障害者」と思い込んでいる人たちは少なくありません。

この固定観念があまりに強かったために、職業とは関係なしに「視覚障害者」の意味で「あんま」という言葉が、最近まで使われることがありました。目が不自由だというだけで、あんまマッサージ指圧師でもないのに「あんま」とか、「あんまさん」と声をかけられて、不愉快な経験をした人たちは少なくないでしょう。

オウム真理教事件の直後、その首謀者が盲学校の卒業生であったことから、白杖はくじょうを手にした生徒が駅のホームで「あんまさん」と呼び止められ、差別的な言葉を投げかけられたことがありました。

本来なら、日本の誇るべき伝統をもつこの職業に嫌悪感さえ抱く若い視覚障害者がいる



前頁の「絵心経」を解説したもの

という話も耳にします。これは日本の盲人の歩んだ歴史を正しく伝えてこなかった学校の教師や社会に責任があると思います。

講演協会の会長の六代目宝井馬琴の得意の演目の一つに「塙保己一と根岸肥前守―出世競べ―」があります。

盲目の辰之助少年と同じ農民出身の由太郎少年が江戸に出る途中、中山道の大宮宿手前の辻堂で偶然出会うって意気投合し、互いに出世を誓いあいました。そして三十年後、一人は大学者、もう一人は、南町奉行として、それとは知らず、お白州で偶然再会し、互いに手を取り合い、その成功をたたえあうという筋です。

段を駆け降りた根岸肥前守と塙保己一が、互いに膝をつき、歩み寄る姿を「……いざり寄る」と表現すると、放送のときカットされ

るか、「にじり寄る」に言い換えなければならないというのです。《いざり》という言葉は差別用語だという理由です。しかし「にじり寄る」では、どうもその場面を描写しきれないと馬琴先生はこぼします。

保己一が生涯心の支えとした般若心経ですが、江戸時代、このお経を、文字が読めない人たちにも読めるようにと、文字ではなく絵で読み方を表したいいわゆる「絵心経」がありました。例えば、このお経は正式名の「摩訶般若波羅密多心経」という長い題で始まるのですが、逆さまにした〈釜〉の絵を「摩訶」と読ませ、へはんにゃの面〉の絵で「般若」、おへそのかかれた〈腹〉の絵で「波羅」、穀物のカラをより分ける農具の〈箕〉で「密」を、へ田んぼ〉の絵で「多」を、神社の〈神鏡〉で「心経」といった具合で、「まか・はんにゃ・はら・みった・しんぎよう」と読ませるわけです。

ところが、昔はこのユニークな仏教典は「めくら心経」とか「座頭心経」と呼ばれていました。たとえ無意識であったにせよ、「めくらは文字が読めない」↓「文字の読めない人のための経典」↓「文化的素養のない人のための経典」という一方的な偏見と先入観から名づけられたものでした。また、「座頭」は当道座の盲人の官位の一つにすぎませんが、広く盲人一般を指す言葉としても使われました。そのため「座頭心経」とも呼ばれたのです。

般若心経の化身といってもいいほど、このお経とともに人生を歩んだ盲目の大学者・塙保己一のことを考えると、文字が読めない人や教養のない人のための「めくら心経」とは、なんと



も皮肉な名前です。

知性の代表的人物の一人であった保己一が愛誦あいしよしたお経だったので、さすがに、気が引けたのでしょうか、いつ頃からか「絵心経」と呼ばれるようになりました。同様に、文字の読めない人のために絵で表現された「めくら暦しよかみ」と呼ばれる暦も作られていました。

### 差別意識解消の近道

保己一の友人に『群書類従』の事業遂行のパートナーでもあった大田南畝がいます。狂歌師としても有名です。多忙な日々を送っていた保己一ですが、狂歌に興じる仲間との付き合いも多く、自分の狂歌名を「水母子すいぼし」と名乗りました。

「水母」とは「クラゲ」のことです。クラゲは目が見えず、エビの目を借りて行動するという古くからの中国の言い伝えがありました。そこで、自分を友人の目を借りるクラゲにたとえたのです。学問をするうえで、いつもほかの人に本を読んでもらわなければならなかった保己一です。友人の南畝は保己一の目となり、手となって、本を読み、保己一の言葉を書き留めていたのです。

片意地を張ったり、背伸びをしたりすることもなく、盲目のために自分でできないことは友人や仲間の人たちに迷わず頼みました。そこには、障害を正面から受け止め、ありのままに生

きる保己一の姿があります。そして、なんのわだかまりもなく、自分を「瞽者水母子」と名乗ったのです。あるがままの自分の障害を受け入れたといったらよいでしょう。「瞽者」とは「盲人」と同じ意味です。

学者として名が知られるようになり、水戸の『大日本史』の校正に関わった時も、他の学者たちから「……めくらに何ができるか。神聖な事業を汚すことになる」などと、差別を経験したのです。しかし、保己一は平常心を失うことはありませんでした。

学問などとても無理と思われていた盲人が、目の見える学者たちでさえなし得なかった文化大事業を成し遂げることができた秘密は、自分を見失わず、ありのままの自分を受け入れた、その生き方にありました。

『藪原検校』という極悪非道の盲人を主人公とした芝居の脚本を書いた作家の井上ひさしさん（故人）は、人権について特別な思いをもって作家活動をしている人です。その著『差別語のための私教版憲法十一箇条』という文章のなかで、こういっています。

第七条　ことばを抹殺まっさつしたからと云って、また、たとえそれをどう言い替えたからと云って、そのことばが示していた差別がなくなったわけではない。

第八条　差別語には差別語の歴史があり、わたしたちはその歴史と勇氣を出して向き合わねばならない。そうする人間の数がふえることによってのみ、歴史の暗部や秘部を乗り

越えることができるだろう。つまりその差別語を作り出している歴史的状況を大勢で意識的に変えなければならぬ。

確かに言葉そのものが差別の原因になることもあります。しかし、「差別だ」と指摘されることをおそれて、他の言葉に安易に言い換えられているとすれば、なんの問題解決にもならないだけではなく、問題をより根の深いものにしてしまうでしょう。ですから、歴史的背景を直視し、すべてオープンにして議論していくことが大切です。

保己一という一人の偉人を通して、思いつくままに歴史を振り返ってみた理由はここにあります。「急がば回れ」といいますが、結果として、これがノーマライゼーション社会への近道だと思えます。バリアフリー社会実現のための最後のバリアは形に現れない心理的バリア・差別です。これをいかに克服するかが現代社会に生きる私たちの課題といってもいいでしょう。こう考えると単に「めくら」を「盲人」または「視覚障害者」というほかの表現に言い換えただけからといって、差別意識の解消には必ずしもつながらないのではないのでしょうか。

真に心理的バリアを解消するために、今、何をすべきか。それこそ障害があってもなくても共に地域社会で当たり前に暮らすということ、これが「ノーマライゼーション」であり、一歩進めて「インクルージョン」なのです。そこで大きな役割を果たすのは「教育」です。教育以外にはありません。

若い人たちにも人気の高い金子みすずの詩「わたしと小鳥と鈴と」の一節はこれからの共生社会の向かう方向を示しているのではないのでしょうか。

……

鈴と、小鳥と、それからわたし、

みんなちがって、みんないい。

むしろ、この個性が大切にされる、そんな社会が、だれもが暮らしやすい社会ではないのでしょうか。小学校、中学校で取り組まれている「交流および共同学習」が一つの手がかりになることを期待しています。

「みんなちがって、みんないい」は、近年、教育・福祉・子育て現場等で、共生社会の合い言葉のように用いられるようになりました。ここに「寛容」ということばを超えた「異文化理解」と「共生」という二十一世紀の課題が見えてきます。



の改訂で、次のように言い換えられています。次の引用個所の太字の部分は新改訳聖書刊行会の従来の訳、( )内は改訂第三版の訳です。

足なえ、おしなど、多くの人々をいやす(多くの人々をいやす)

それから、イエスはそこを去って、ガリラヤ湖の岸を行き、山に登って、そこに座っておられた。すると、大ぜいの人の群れが、**足なえ**(足のなえた者)、**不具者**(手足の不自由な者)、**盲人**、**おしの人**(口のきけない者)、そのほかたくさんの人をみもとに連れて来た。そして、彼らをイエスの足もとに置いたので、イエスは彼らをおいやしになった。それで、**群衆は、おし**(口のきけない者)**がものを言い、不具者**(手足の不自由な者)**が直り、足なえ**(足のなえた者)**が歩き、盲人が見えるようになったのを見て、驚いた。**

この聖書の翻訳者は次のように言っています。

現代の日本語で不快感や差別感を与えないと思われる客観的叙述に言い換えました。例えば「めくら」「おし」「つんぼ」などは、今日では使われなくなっているわけですから、「目の見えない人」「口のきけない人」「耳の聞えない人」と訳

すようにしました。ただ、言い換えただけで内実は何も変わらない。差別の心はそのまま残るといふことがあると思いますね。出版社やメディアは非常に差別語・不快語に神経をとがらせて自主規制をしている。けれども本当に大切なのは、ただ言い換えて済ませるといふのではなく、差別がある現実をしつかりそのまま見つめるということが大事だろうと思うのです。差別を隠すのではなく、聖書に基づいて、弱さをもっている人々と本当の意味で共に生きるということが主眼であって、言い換えることが主眼でない。(新改訳聖書刊行会ホームページ・<http://www.seisho.or.jp>)

ここに述べられているように、差別につながりかねない表現を排除することの意義をしつかり押さえる必要があります。一方、言葉をかえただけで差別や偏見をなくせるものではないことも事実です。

この聖書の翻訳者がいうように、言葉が差別するのではなく、心が差別するものだからです。ここで差別意識を捨てるためには、幼い時からの「共に学び、共に育つ教育」が大きな意味をもってきます。統合教育、インクルージョン教育の意味はここにあるのです。

付録  
盲目の先人たちの横顔



\*掲載は出生年代順です

蟬丸（せみまる） 生没年不詳

平安時代前期の歌人であり、琵琶法師。蟬丸は「これやこの 行くも帰るも分かれては 知るも知らぬも逢坂おうさかの関」という百人一首の和歌で広く知られている歌人である。この人物は仏教説話集である『今昔物語』に出てくる盲目の琵琶法師であるが、その詳しい人物像はわかっていない。

蟬丸についての記述は、他の仏教説話のように善因善果ぜんいんぜんか、悪因悪果あくいんあくかを説くためではなく、芸能における盲人の果たしてきた役割を伝えている。蟬丸が仕えていた主人は琵琶の名手でもあり、蟬丸は熱心に他の奏者の演奏を聞いて修業し、ついには琵琶演奏の名人になったというのである。蟬丸以降、盲目の琵琶法師の伝統が始まり、さらに平家琵琶に発展していったと考えられる。

明石覚一（あかし かくいち） 一三〇〇?—一三七一

中世の琵琶法師の集団は「当道座とうどうざ」と呼ばれ、明治四（一八七二）年に政府により盲官廃止の布告が出るまで、幕府の保護政策もあって、精神的、経済的に盲人たちを支えてきた。この当道座の制度の確立に大きくかかわり、同時に平家琵琶の節を改作・増補し、室町時代における平家琵琶の黄金期の基礎を築いたのが明石覚一である。

宮中の宴にも招かれて演奏するなど、平曲の名手として知られ、総検校そうけんぎょうになって一座を率いた。今日伝えられている『平家物語』は、多くの人の手によりまとめられたと考えられるが、明石覚一がこの物語の成立に大きくかかわったことは疑いの余地がない。

ジョン・ミルトン (John Milton) 一六〇八—一六七四

イギリス文学史上のもっとも偉大な作品の一つとされる大叙事詩『失樂園』(Paradise Lost) を書いた盲目の詩人。

清教徒革命がおこると共和制を支持したが、革命は無惨にも失敗に終わった。王政復古による失意のうちに、公職を退いたが、四十歳過ぎに失明の悲劇に見舞われる。王政復古後、王党派の報復を受け一時身柄を拘束されるが、間もなく釈放された。その直後から約五年の歳月をかけて、盲目にもかかわらず、あきらめずに口述筆記を続けて、この大叙事詩『失樂園』を完成させた。

その作品は今日でも多くの人たちによって愛読されている。ほかに『樂園回復』(Paradise Regained)、『闘士サムソン』(Samson the Agonist) 等がある。ジョン・ミルトンは社会参加し、活躍する盲人の象徴的な存在でもある。

杉山和一 (すぎやま わいち) 一六一〇—一六九四

主に晴眼者による伝統的な鍼術に代えて、管鍼法(くだぼり)をあみだし、さらに鍼按(はり・あんま)を盲人の職業として確立した。この功績により「はりの神様」と称えられ、東京墨田区の江島杉山神社に祭神として祭られている。江戸の師匠・山瀬琢一から破門され、失意のうちに故郷に戻る途中立ち寄ったのが盲人の守護神といわれる江の島の弁天社であった。そこで偶然にも「くだぼり」を思いついたと伝えられている。

この江の島には杉山和一の墓があり、今日でも参拝者は絶えない。和一によって著わされた「杉山流三部書」という自ら創設した盲学校(鍼治講習所)の教科書があり、今日においても活用され

ている名著である。塙保己一の『群書類従』とともに盲人の手による代表的な著作である。

五代将軍徳川綱吉を治療し、以来、鍼按が盲人の専業として幕府に保護され、「あんま・はり」と言えは盲人の職業として公認された。この伝統があんまマッサージ指圧師・はり師・きゅう師を養成している今日の視覚障害特別支援学校(旧盲学校)に伝えられている。

### 八橋城秀(やつはし じょうしゅう) 一六一四―一六八五

江戸時代前期の箏曲(琴)の名人。生まれは現在の大阪府とも現在の宮城県ともいわれ、詳細は不詳。

はじめは三味線で活躍したが、その後、江戸にくんだり、筑紫流箏曲を学んだ。この箏曲を基に現在の日本の箏の基礎を作り上げた。独奏楽器としての楽器や奏法を改良するなど、箏曲の発展に努めた。代表作に組歌の『梅が枝』、『菜露』などがあり、また、段ものの『六段の調』、『八段の調』も八橋検校の作と伝えられている。

その芸術性が高く評価され、現在の福島県の磐城平藩に召し抱えられたこともある。八橋検校の死後、その業績を偲んで、琴の形を模した堅焼き煎餅が配られたといわれ、これが京都の銘菓「八ッ橋」の始まりと伝えられている。

### 米山銀一(よねやま ろういち) 一七〇二―一七七一

明治の政治家・勝海舟の曾祖父。「はりの神様」と言われる杉山和一の直弟子。「米山甚句」等で知られる越後の霊峰米山に近い農家出身の盲人である。江戸に出て、はりの修業をし検校の位に進んだ。

本職の鍼治療のかたわら、座頭金の儲けを原資に水戸藩等の諸藩に貸し付け、莫大な財を成した。旗本の株を買い、子孫は武士の身分になった。一方、飢饉に苦しむ故郷の人たちや盲人を救済した人物としても知られている。

また、全国の貧しい盲人を対象に按摩師・鍼師を養成し、養成後は出身地に帰し、地元で活躍させようと、全私財を投げ出して盲学校の設立を計画し、奔走した。しかし、利害が絡む同業者が保身のために反対運動を展開し、この計画は挫折せざるを得なかった。講談では慈悲深い人物として『男谷検校』または『米山検校』という演目で語り継がれている。

#### 雨富須賀一（あめとみ すがいち） 生年不詳—一七八四

塙保己一が江戸に出て、盲人一座に入門した時の師匠。現在の茨城県笠間市の農民の出身で本姓は「塙」。保己一は後に塙姓を許され「塙保己一」を名乗る。

須賀一は鍼按（はり・あんま）の修業のために江戸に出て身を立、保己一が入門した当時、鍼術の名人としてその名を知られ、旗本屋敷が立ち並ぶ四谷の西念寺横丁に居を構えていた。保己一は入門したものの、盲人一座の特権として認められていた音曲（琴、三味線）及び鍼按にまったく上達が見られなかったが、師匠は破門しなかった。そればかりか、盲人には不可能と思われた「学問」の道に進みたいという無謀とも思える希望を認め、生涯にわたって精神的、金銭的にも支援した。塙保己一の第一の恩人である。

#### 滝沢馬琴（たきざわ ばきん）「曲亭馬琴（きょくてい ばきん）とも」一七六七—一八四八

江戸時代の読本作者の第一人者として知られ、『南総里見八犬伝』を二十八年かけて完結した。

「犬」の字を苗字に冠した八人の剣士が活躍する世界にも類を見ないといわれる長編である。

執筆の途中、失明という悲劇に襲われるが、完結までにはいまだ多くの歳月がかかることが見込まれ、悩んだ末、息子の嫁に口述筆記させることを思いついた。しかし、当時の一般女性にとつて、多少の学問があるとは言え、漢字・漢語を好んで用いる馬琴の文章を書きとるには想像を超える困難が伴った。読み書きが堪能であったとは思えない嫁に一字一文字忍耐強く教えながら口述筆記をさせ、ついにこの大作を完成させたのである。

他にも源為朝の勇壮な生涯を描いた『椿説弓張月』などの長編がある。

### 三芳野城長（みよしの じょうちょう） 一七九二—一八四九

本名は沼田順義。現在の群馬県高崎市の農家出身の盲目の国学者。幼くして眼病を患い弱視となり、後に完全に失明した。困難な中で医学を学ぶとともに、あんま・はりで身を立てながら、儒学及び国学の研究に励んだ。その学識が認められ、埼玉県の川越藩に召し抱えられ、学問を講じた。賀茂真淵や本居宣長の学問に反論し『級長戸風』等を著わし注目を浴びた。その立場は林大学頭から支持された。

盲人一座では検校に進み、三芳野検校城長を名乗った。塙保己一から直接教えを受けることはなかったが、盲目になってもくじけず、学問を続けられたのは、出身地が互いに近い群馬の高崎市と埼玉の本庄市ということに親しみを覚え、学問の世界で活躍する保己一が存在に大いに励まされたことが推測される。

フランス人の点字の発明者。今日世界中で採用されている横2×縦3の六つの点で表す点字は、ブライユが考案したものである。ブライユ十五歳のときであった。

三歳のとき、事故で目に怪我をし、五歳で失明した。パリ盲学校在学中に、軍隊で用いられている夜間でも指先で解読できる十二点で表す暗号を、ブライユが盲人用に改良したものが今日の点字の原型である。

東京盲啞学校の教師であった石川倉次はブライユが考案した六点式点字で日本語を表記することに成功した。これが正式に採用されたのが、明治二十三（一八九〇）年十一月一日のことで、以来この日が我が国の「点字の日」と定められている。

なお、英語では発明者の名前「Braille・ブライユ」をそのまま「ブレイル」と英語読みして「点字」の意味に用いている。

#### 葛原勾当（くずはら こうとう） 一八一二—一八八二

琴の名手として知られる葛原勾当美濃一は現在の広島県福山市の出身。三歳で天然痘にかかり両目を失明し、九歳で琴を習い始めた。その後、十一歳で京都に上り箏曲の教授を受け、十六歳からは自ら弟子の稽古に当たった。

この頃から教授内容を誤って繰り返し教えたり、とぼしたりしないように代筆による日記をつけ始めた。二十六歳からは自ら考案した木活字を用いて日々の出来事、和歌等を記した。ヘレン・ケラーはこの木活字を手にし、日本のタイプライターだといって賞賛したという。

明治十五（一八八二）年七十歳で病没するまで続けた日記は、孫の葛原しげるにより『葛原勾当日記』として出版された。「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む……」で始まる童謡「夕日」は葛原しげ

るの作詞である。

### ヘレン・ケラー (Helen Adams Keller) 一八八〇—一九六八

目が見えず、耳が聞こえないという重度の身体障害を負ったアメリカ合衆国の女性である。教育家・社会福祉事業家として世界各地を訪問し、身体障害者の教育・福祉に、さらに世界平和に貢献した。

生後十九ヶ月で熱病にかかり、医師と家族の懸命な治療で命は助かったものの、視力と聴力を失い、話すことさえできなくなってしまう。彼女が七歳のとき両親は聴覚障害教育の専門家であるアレクサンダー・グラハム・ベル博士(電話の発明者として有名)を訪れ、博士に娘の家庭教師を探してもらうようにパーキンス盲学校の校長に依頼してもらった。紹介されたのが、その盲学校の卒業生であるアン・サリバン先生である。彼女はその後半世紀にもわたって家庭教師として、またヘレンのよき理解者として支え続けた。大学に進学した最初の視覚障害者であるが、優秀な成績で卒業した。

ヘレンは社会事業家であるだけではなく、政治活動においても活躍した女性である。ヘレンとサリバン先生の半生は『奇跡の人』として舞台化および映画化され、日本人にもなじみ深い。ヘレンは日本の盲目の学者である塙保己一を尊敬し、目標にして努力したという。戦前と戦後と計三回来日し、障害者理解・啓発(けいはつ)を訴えるとともに、我が国の障害児教育行政、福祉行政に大きな影響を与えた。

### 熊谷鉄太郎 (くまがい てつたろう) 一八八三—一九七九

三歳のときに天然痘にかかり、失明した。六歳のとき、盲目の学者塙保己一の話聞き、目が見えなくても立派に生きてゆくことができると確信したという。

小学校に入学が認められず、鍼按の修業を始めたが、そこで①東京盲啞学校という盲人が学ぶ学校があること、②盲人でも読み書きできる「点字」があることを知った。盲啞学校卒業後、横浜訓盲院の鍼按科の教師になった。その後、日本で最初の盲人の大学生として関西学院で学び、後に外務省の委託を受け、タイのバンコク盲学校の責任者を務めた。

熊谷は生涯を通じて常に、「たとえ盲人であっても、一人の人間として、人間らしく生きること」「盲人が人間らしく生きられる社会をつくること」という理想を追い求めた。

### 宮城道雄（みやぎ みちお） 一八九四—一九五六

兵庫県神戸市生まれの生田流箏曲の演奏家、作曲家。代表作に『水の変態』『春の海』『さくら変奏曲』『越天楽変奏曲』等多数。

七歳ごろ失明し、八歳で琴を習い始める。十三歳のとき、一家の生計を支えるため朝鮮半島に渡り、琴及び尺八を教える。彼の才能は洋楽系作曲家、評論家、学者などに注目され、助言や後援を受ける。

大正九（一九二〇）年、本居長世（むねながよ）と協同で新作発表会を「新日本音楽」と銘打って開く。放送やレコード活動、さらに大正十二年から尺八家の中尾都山と組んで各地を演奏旅行し、その名声は全国的に広まった。またフランスのバイオリン奏者、ルネ・シュメーは宮城の『春の海』を編曲して宮城と合奏し、それをレコードに吹き込み、世界的名曲ならしめた。東京音楽学校（現東京芸術大学音楽部）教授となる。芸術院会員。NHK第一回放送文化賞受賞。



昭和三十一年（一九五〇）年六月二十五日、関西への演奏旅行の途上、東海道線刈屋駅付近で夜行列車から転落し死亡した。

鳥居篤次郎（とりい とくじろう） 一八九四—一九七〇

京都の旧家に生れた鳥居は四歳のときに失明。東京盲学校師範科を卒業後は盲学校の教員になり、盲教育に情熱を注いだ。後に京都府盲人協会を結成し、また京都ライトハウスを設立し館長を務めると同時に、エスベランチストとして、日本を代表して視覚障害関係の国際会議に出席している。「困難と不可能を混同してはいないか。不便や不自由、困難は努力すれば打ち勝つことができるはずだ。肉体の闇を心の光に代えて、勇気と忍耐と不拔の意志をもってあたれ」「やみと光は一如である」等の「盲目の宣言」をうたいあげて、たくましく生命力の充実した盲青年の育成に取り組んだ。

岩橋武夫（いわはし たけお） 一八九八—一九五四

早稲田大学在学中に失明し、将来を絶望して一時は自殺を考えたこともあった。しかし、関西学院で学んだあと、イギリスに留学し、卒業後の人生を盲人社会福祉事業に捧げようと決意した。帰国後、盲人施設ライトハウスを開設するなど、社会福祉事業に取り組んでいった。

岩橋夫妻はアメリカのハーバード大学から招かれてアメリカ各地を訪問した折、ヘレン・ケラーに出会い、互いに盲人問題を熱心に語り合ううちに親しい友人となった。この友情は生涯続き、その縁でヘレンは日本を三度訪れ、各地で講演会を開き、多くの障害者に生きる勇氣と希望を与えた。その影響で障害にめげず輝いて生きた人たちも多い。

ヘレン・ケラーの講演には、通訳として岩橋武夫が同行することもあった。

小林ハル（こばやし はる） 一九〇〇—二〇〇五

江戸時代に組織された瞽女集団の最後の一人、人間国宝。「瞽女」とは三味線ひとつで各地を渡り歩き、三味線や歌を披露して報酬を得た盲目の女旅芸人である。

ハルは新潟県三条市の農家に生まれ、生後間もなく失明した。五歳のとき、村にやってきた瞽女の親方に祖父がハルを預かってほしいと依頼。六歳で瞽女の親方に弟子入りし、不屈の精神で瞽女唄の第一人者となった。

七歳から三味線の稽古が始まり、血のにじむような修業の日々が始まった。三味線を弾く細い指を親方が押さえ、手はいつも血にまみれた。初めて親方に連れられて旅に出たのが九歳の時。小さな体に自分の分と、親方の分の荷物を背負って旅を続けた。

晩年は、盲老人ホームに入所し、公演活動を続け百五歳で天寿をまっとうした。実に百年近い芸能生活であった。

高橋竹山（たかはし ちくざん） 一九一〇—一九九八

青森県生まれの津軽三味線の名人。一地方の芸であった津軽三味線を全国に広めた第一人者である。演歌歌手北島三郎が歌った『風雪ながれ旅』のモデルである。

十六歳のとき「ボサマ」として独り立ちした。ボサマとは、門付けしながら放浪する盲目の旅芸人のことである。二歳で失明した貧しい盲少年の生きる道は、ボサマになるしかなかった。

戦争が激しくなると、三味線では生きていけないと考え、三十四歳で青森県立八戸盲啞学校に入

学し、鍼灸・あんまマッサージの免許を取得した。戦後は、三味線の演奏家に戻り、八十七歳で亡くなるまで、この道ひとすじに生きた。吉川英治文化賞、勲四等瑞宝章。

しかし、竹山にとっては「芸術のための三味線」というより、むしろ「差別との闘い」であり、「生きるための三味線」であった。

#### 本間一夫（ほんま かずお） 一九一五—二〇〇三

日本点字図書館の創設者で視覚障害者の父と慕われた。北海道の資産家に生まれ、五歳のときに脳膜炎で失明した。函館盲啞院にはじめて入学したのは十三歳のときであった。関西学院に入学し、優秀な成績で卒業した。

戦争が危ぶまれた一九四〇年、東京豊島区の借家で日本盲人図書館を開設し、翌年には東京の新宿区高田馬場に移転した。間もなく戦火に追われて、茨城、北海道と点字図書とともに疎開し、郵送による図書館事業を發展させていった。戦後の一九四八年、疎開先の北海道から東京に戻り、日本盲人図書館は「日本点字図書館」と改称した。

ただ一人で始めた点字図書館は職員百名余を抱え、蔵書十四万六千冊にも及ぶ世界屈指の点字図書館に發展し、今日に至っている。